スケッチ

せり～ぬ少納言

（ランドセルを背負う子）

（ランドセルを背負う子）

　飛べると思った。昨日見たメリー・ポピンズみたいに。僕は息を吸って風のにおいを確かめる。傘の柄を握る手にぐっと力が入る。

　雨がザヤザヤと見物に集まってきた。でも動じるな。前だけを向くんだ。心に言い聞かせる。じっとタイミングを見計らう僕。その瞬間、髪の毛がこめかみを叩いて合図した！　今だ！　僕は走り出す。全力で。そしてアスファルトを蹴る。

　足元で雨の拍手が沸き起こった。傘が磁石みたいに風に吸い寄せられてくっついた。僕は宙にいた！　本当に。手首がくすぐったい。耳がブオブオする。僕は足がなくなる。心が僕の体を飛び出して、ビルの間からどんどん雲に近づいていく。……あぁ、なのに！　磁石はあっという間に取れてしまう。いとも簡単に。心が雲に着いた時、僕はもう地面にいる。

　それでも嬉しくて僕は走るのを止められない。僕は後ろを振り返る。何度も何度も。この空間のどこかに、僕が飛んだ跡があるかと探しながら。

（相々傘の老夫婦）

（相々傘の老夫婦）

　風が出てきた。私たちは傘を少し前に傾けて、更に身を寄せ合った。それにしても譲ってもらっちゃって助かったね、と話しながら。

　ゆっくりと歩を進める私たちの間にそれ以上の会話はない。代わりに、言葉よりも雄弁な沈黙が流れている。その間を縫うように車のタイヤの雨水を弾く音が通り抜けていく。傘の持ち手の上で重ね合った手から、お互いの体温が伝わる。

　いつ頃からだろう。こんな悪天候さえも、幸せの絵を引き立てる額のように感じられるようになったのは。前方から小さな小学生の男の子が私たちの方へ駆けてきた。すれ違う時、その子が何やらすぐ横でジャンプするのを、二人して微笑ましい気持ちで眺めた。

　家はもうすぐそこだ。私たちは急がない。何度も過ごしたようでいて実はどれひとつ同じもののない日常を、こんな風に丁寧に生きていたいと思う。

（傘を持たない少女）

（傘を持たない少女）

雨があたしの額に、頬に、首に降り注ぐ。

持っていたビニール傘は、駅の階段の前で見知らぬ老夫婦にあげてしまった。使って下さい、迎えの車が来るので私は大丈夫です、なんてもっともらしいことを言うと、何度も頭を下げられた。不用品を処分しただけなのに。

ただ雨に洗われたいだけだ。こんな日には。あたしは制服のブラウスの袖を捲り、両腕を広げて冷たさに全身を晒す。そうして雨が全部の偽りを流し去ってくれないかと願う。

もうあたしには分からない。どこまでが実像のあたしで、どこからが虚像なのか。どうして誰かといるほど孤独になる？　どうして歩調を合わせるほど距離が広がる？　本物を護るための贋物に覆われて、今となっては本物さえ贋物に見える。こんなはずじゃなかったのに。

誰もが舞台の上で与えられた役を演じている。煌びやかな照明があたしたちを照らしている。だけど台詞を読み上げようとして、あたしは気づくんだ。観客が一人もいないことに。あたしは劇場を飛び出して、衣装を脱ぎ捨てようとするけれど、その時にはもう衣装が皮膚にこびりついている。無理に引き剥がそうとすれば全身から血が出てしまう。

もっと強く降らしてよ！　あたしは心の中で叫んだ。灰色に壊れる空に向かって。あんただけが今はあたしの味方だから。

（子連れの女性）

（子連れの女性）
「莉央、ちょっと待ちなさい！」
　私は娘に向かって呼びかける。けれど娘は笑いながらドタドタと走っていって、遂には通行人の足にぶつかった！　慌てて娘を自分の方に引き寄せ、すみません、と相手の少女に謝る。少女は何も言わないどころかこちらを見ようともしない。だらしなく制服を着崩して傘さえ差していない。娘が今度は歩道脇に停めてあるバイクに触れようとする。全てが苛々する。
「危ないでしょう！」
　そう言って思わず手を上げてしまった。叩く瞬間、娘のびくついて固まる様子にハッとしたのに、勢いを止められなかった。娘は泣き出した。私はすぐに娘を抱きかかえた。後悔の念と共に。首と肩の間に不器用に挟んだ傘が、責めるようにずり落ちてくる。後頭部に当たって痛い。ふと見ると、私のジーンズも娘の長靴についていた泥で汚れている。でももう引き返して着替える時間も余裕もない。今頃ちょうど着いているはずだったのに、健診まで恐らくあと十分切っている。
　あぁ、どうしてこんな風に当たってしまったんだろう。なんて駄目な母親なんだろう。雨と自己嫌悪が降りしきる中、とにかく私は病院までの道を急ぐ。

（スーツ姿の男性）

（スーツ姿の男性）

パーキングプラザの三階に車を止め、エレベーターに向かっている。歩きながらも俺は、無意識的に傘の壊れた箇所を見てしまっている。ちゃんと直るだろうかと。

それにしても何が原因だ？　七つくらいの頃、メリー・ポピンズのように飛ぼうとして振り回していた子供用傘だって、あれだけ粗雑な扱いの中ビクともしなかったのに。いつやってしまったのかさえ分からない。昼前、オフィスの入ったビルから近くの銀行まで歩いて出た時に、骨の一本が折れているのに気づいた。朝家から持ってくる時もそうだったのか？　オフィスに戻り、こっそりパソコンで直し方を調べていたところ、このパーキングプラザに近接する百貨店の中に修理してくれる店があるのを知った。それで俺は仕事帰りに立ち寄ることにしたのだ。

エレベーターが下りてきて扉が開く。乗り込むのは俺だけで、中にも誰もいない。ボタンを押して動き出すと、ふとこの傘をプレゼントしてくれた時の妻の顔が浮かんだ。これなぁんだ？と妻は得意気に言ったものだ。後ろから俺の目を手で塞いで。手に取るやいなや俺は笑いながら答えたものだ。傘だろう？　こんな形、傘しかないだろう？

エレベーターを降りてパーキングプラザの入り口まで来ると、強い雨が俺を押し止めた。風もある。昼前より明らかに天気が悪くなっている。しばらく雨宿りするしかなさそうだ。

俺は入り口の壁に寄りかかる。そして煙草に火を付け、ぼんやりと通りの方を眺める。行きかう人々は皆傘を差している。黒、紺色、ピンク、透明、チェック、水玉、花柄……。この一本一本には、それぞれどんな思い出や記憶があるのだろう。

道路をはさんだ向かいの小児科の入り口に、近所に住む川本さんと娘さんの姿を見つけた。ちょうどかわいい盛りの娘さんは、お母さんに手を引かれてよちよちと中に入っていく。遠くない将来、妻や俺もああやって子供を連れて歩くのかと思うと、感慨にも似た不思議な気分になった。

雨足は弱まりそうにもない。道路を走る車のワイパーがせわしなく動いている。俺は携帯灰皿に煙草の吸殻を捨て、壊れた傘にもう一度目をやった。しょうがないなぁ、お前はまったく。そうひとりごちて、交差点の信号が青になるのを見計らい、雨の中に一歩踏み出した。